神宮と伊勢のまちを伝える　OISESAN NEWS

お伊勢さんニュース

伊勢文化舎／〒516-0008　三重県伊勢市船江 2-22-25　TEL 0596-23-5166　FAX 0596-23-5241　E-mail otayori@isebito.com

第5号

5

●企画・発行　伊勢文化舎
●発 行 日　令和7年8月10日
●発行部数　55,000部
●協　　力　神宮司庁
神社本庁
近畿日本鉄道（株）
伊勢御遷宮委員会
伊勢のお木曳行事調査団
伊勢志摩観光コンベンション機構

令和のご遷宮が始動！

木曽では御神木が伝統の「三ツ緒伐り」により倒された。各地で盛大な歓迎を受けて伊勢の神域へ。

令和のご遷宮最初のお祭り「山口祭」が、雨の降る中で、五月二日、執り行われました。木曽では御神体を納める器「御樋代木」を伐り出す「御杣始祭」、「裏木曽御用材伐採式」がありました。伐採された御神木は長野、岐阜、愛知を経て伊勢に搬送、そして、川曳・陸曳により神宮神域に運び込む「御樋代木奉曳式」が行われました。各地での奉曳には多くの人たちが参加し、御神木を通して心が一つに繋がる「祭りの力」を感じさせるものでした。その奉曳の折り、見学に訪れていたポーランド出身で皇學館大学に留学中の女性タカジナ・ロレンスさん（22）に話を聞くことができました。

「ポーランドは『分割と統合』を幾度も経験してきました。遷宮は母国の建国よりも三百年長い千三百年の歴史があることに驚きました。この制度は世代を超えて人々を繋ぐ素敵なもので、古くから受け継がれてきた技術も日本の宝物だと思います。欧州の若者の中にも遷宮に関心を持つ人が少なくありません。遷御はまだ先ですが、世界でも例を見ない日本の遷宮を知れば欧州からも大勢の若者が訪れるのではないでしょうか。私自身も、その時に再び伊勢を訪れたいと願っています」。

ご遷宮を伊勢から世界へ

グローバル化が進む現代において、国や地域が長年育んで来た歴史や文化が失われる危機に直面しています。しかし、小紙三号のインタビューで、櫻井治男皇學館大学名誉教授は「どのような状況でも神宮には飲み込まれない文化が根底に流れている」と語ります。

今回のご遷宮は唯一無二の「遷宮文化」を世界に発信していくまたとない機会であり、ロレンスさんのような若者にその橋渡し役を期待したいと思います。昭和、平成と、遷宮を取材しましたが、今回は特にその可能性を強く感じました。

本紙発行人　中村　賢一

目次

2面　第六十三回神宮式年遷宮
はじまりの祭り　山口祭・木本祭
3面　御神木を伝統の技で伐る杣人の誇り
御杣始祭
4面　木曽郡上松町で御神木祭
斧の技術と森の歴史を伝える
裏木曽御用材伐採式
5面　御樋代木奉迎送　御神木の旅
6面　御樋代木奉曳式（川曳・陸曳）
7面　お木曳行事入門講座　其の二
御用材はいつ木曽から伊勢へ
8面　伊勢志摩のまつり暦・ご案内

杣頭の「いよいよ寝るぞ！」の声と共に御神木（外宮）は低い響き音を立てゆっくり倒されていく（6月3日　木曽谷国有林での御杣始祭）　撮影・本紙

第六十三回神宮式年遷宮

はじまりの祭り　山口祭・木本祭（このもとさい）

令和初の式年遷宮がはじまった。三十三の祭典を重ねる式年遷宮の最初は、山口祭と木本祭。新緑の中に五色の幣（みてぐら）を立て、真っ白な斎服の神職と青い素襖（すおう）の小工（こだくみ）に、かわいい童男・童女も加わって、古式ゆかしく行われた。

五色の幣を掲げた小工たちを先頭に祭場へと向かう（内宮）

御用材伐採の安全を祈る

令和七年五月二日朝。降りしきる雨の中、内宮の神域を、傘を用いた神職や小工らの祭列が正宮に向かった。八年にわたり三十三もの祭りを重ねる式年遷宮の最初の祭り、山口祭である。山口祭では、新しいお社の御造営用材を伐り出すに当たって伐採と搬出の安全を祈り、山口に坐す大神をお祀りする。御用材を伐り出す山は御杣山と呼ばれ、この度の遷宮では天皇陛下の御治定（じじょう）を賜り木曽の国有林が定められたが、山口祭は今も、皇大神宮は神路山の、豊受大神宮は高倉山の麓で斎行される。それに先立って、正宮への拝礼や饗膳（きょうぜん）の儀が行われる。

正宮での丁重な拝礼

内宮斎館を出発した祭列は、大宮司が務める神宮式年造営庁総裁以下、真っ白な斎服（さいふく）の神職や縹（はなだ）色の素襖に明衣（みょうえ）を掛けた小工たち、半尻（はんじり）姿の童男や袒（あこめ）を着た童女もまじり、総勢七十六人に及ぶ長いもの。さらに、その後ろには黒い礼服を着用した参列員が続く。

修祓（しゅばつ）を終え、本来は正宮中（なか）重（のえ）で行う八度拝による拝礼は、雨を避け四丈殿で行われた。その後、第一別宮の荒祭宮を遙拝し、約半数が五丈殿に向かった。

饗膳の儀。物忌の子どもたちも形だけ盃を受ける（外宮）

饗膳の儀で盃を交わし　五色の幣あざやかに祭場へ

五丈殿では、饗膳の儀が行われる。これは、かつて朝廷から遣わされた使者と神宮の神主らが一堂に会して祝い膳を囲んだことに由来する〝顔合わせ〟の宴席。上席には黒（くろ）木に檜葉（ひば）が敷かれた机に、高く盛られた飯や土器に盛られた鯛汁、雑煮など十三品目、下座は素木（しらき）机に十一品目のご馳走が並ぶ。神職らの間に物忌（ものいみ）の童男、童女も席に着き、作法通りに御神酒が三献ずつ廻る。

饗膳の後、山口祭に御奉仕する人々が忌火屋殿（いみびやでん）前に並び修祓を受ける。続いて、五色の幣を掲げた小工たちを先頭に、お供えの白鶏が入った籠や神饌の入った辛櫃（からひつ）などを携え、神職や物忌、技師らが祭場へと向かう。

祭場では、四隅と中央に幣を立て、祭員らがそれぞれの座に付くと、祭場を祓い、御饌（みけ）を奉げ、祝詞を奏上。八度拝での拝礼の後、御饌を下げる。続いて、物忌が忌鍬（いみくわ）で三つの箱に収められた鎮め物を埋め、忌鎌（いみかま）で草木を刈り初める儀が行われた。白鶏は、祭りの後、山に放たれたという。

同日正午から、外宮で同じ祭りが行われた。

忌鎌を奉げて草刈り初めの儀を行う。雨天によりテントを使用（外宮）

浄闇の中、修祓を終え祭場へ。少人数で行われる木本祭（内宮）神宮司庁提供

神秘の中に木本祭

同じ日の夜、雨の上がった両宮の山中では木本祭が行われた。遷宮で最初に伐られるのは心御柱（しんのみはしら）となる御料木。木本祭ではこの木本に坐す大神を祭り、御料木を伐り採る。

心御柱とは、正殿の中央床下に立てられる柱で、建築的な意味は持たないが、古来神宮で最も重要な御柱とされ、今でも神職はそのことを口にすることさえはばかるほどという。ゆえに、内宮は神路山、外宮は高倉山と祭場となる山の名が発表されるだけで詳細は秘され、浄闇（じょうあん）の中で行われる。この夜、午後八時に内宮斎館を出発した祭列は、忌火屋殿前で修祓を受け、正宮で拝礼。五色の幣を掲げ白鶏や御饌を担いで祭場に向かった。

深夜、外宮においても同じ祭りが斎行された。

取材・文　堀口裕世／撮影　本紙

明治13年（1880）、明治天皇の御聖断を仰ぎ、
伊勢神宮の遥拝所として建てられたのが
「東京皇大神宮遥拝殿」、いまの東京大神宮です。
皇室の御祖神である天照大御神をまつり、
国民の総氏神と仰がれる
伊勢神宮（内宮）の御神徳を
皇都東京にあまねく宣布し、
都民の心のよりどころとなるようにとの
願いから創建され、140年余の歳月が流れました。
「東京のお伊勢さま」東京大神宮は、
いまも伊勢神宮と都民の心を結んでおります。

東京のお伊勢さま
東京大神宮
〒102-0071　東京都千代田区富士見 2-4-1
電話（03）3262-3566　FAX（03）3261-4147
https://www.tokyodaijingu.or.jp/
JR総武線、地下鉄東西線・有楽町線・南北線・大江戸線
「飯田橋駅」徒歩5分

御神木を伝統の技で伐る杣人の誇り

御杣始祭

上松町

六月三日

森を湿らす雨音に混じって鳥の鳴き声がする。参列者を迎えた祭場の前に樹齢三百年の木曽ヒノキが堂々とそびえる。祭典がはじまると、先ほどまでの鳥の気配が消えた。

宮司庁の神職による神事が、内宮木・外宮木の順に始まった。山口祭同様に、神饌には白鶏や鶏卵などが並び、祝詞が読み上げられる。その後、白装束の技師と青い素襖に侍烏帽子の小工が、御料木の前で忌斧を振る所作を行って、神事が終了。参列者が見守る祭場にも緊張が走り、いよいよ伐採が始まる。「伐倒方向よし」を合図に、白い作業着に「太一」のヘルメットを被った杣夫たちが斧を振る。木曽の林業関係者でつくる「三ツ紐伐り保存会」と神宮の営林部が担当し、この日に向けて、三方向から斧を入れる「三ツ緒伐り」の練習を重ねてきた。

止まない雨の中、コーン、コーンと慎重に一振り一振り、狙ったところに斧を当てていく。一時間ほど経ったころ、内宮木の杣頭、橋本光男さん（72）の声が森に響いた。「大山の神、左斧、横山、一本寝るぞー」。〝寝る〟とは、大切な木を伐り倒すこと。巨木への畏敬の念を込めて表現される。張り詰めた空気の中、続く「いよいよ寝るぞー」の一声で、勢いよく斧が振り下ろされると、木は傾き始め、ドッバーンと鈍い地響きを立てて、大地に横たわった。続いて外宮木も同じように寝かされると、祭場から大きな拍手が沸き起こった。

木曽川に張り付くようにまち並みが形成された長野県上松町は、面積のほとんどが森林。まちの南西部に広がる赤沢自然休養林は天然の木曽ヒノキが育つ美林地帯で、そのゲートから十分ほど走った深い山中に、今回の御杣始祭の祭場が造られた。

御杣始祭は、式年遷宮の御用材を伐り出すことを山の神に告げる祭りで、御神体を納める器となる「御樋代木」が奉伐される。内宮用・外宮用に選ばれたのは、推定樹齢三百年のヒノキの大木だ。

山の神に祈り斧を振る

御料木がそびえる祭場には五色の幣が立てられ、神宮大宮司・少宮司、地元の奉賛会や林野庁、伊勢市長などの来賓およそ三百五十人が参列。黒田清子神宮祭主が到着すると、神宮式年造営庁と神

森に感謝し、たすき掛けに寝かす

内宮・外宮のそれぞれの御料木は、倒れたときに、二本の木が交わり、たすき掛けにならねばいけない。間隔が離れすぎていない二本が条件となる。木曽とはいえそんな状況で育つ立派なヒノキを探すには苦労もあるだろう。二十年ごとに御樋代木を必要とする遷宮が、持続可能な森を意識付ける。

倒された木の根元に杣夫たちが集まる。鳥総立て（地元では株まつり）と呼ばれる山の風習だ。長い時間をかけて育まれた木を、造営に使わせていただくことに感謝するもので、切り株に先端の梢を挿して、その再生を願う。梢を取りに走ったのは保存会最年少の今井竜太さん（32）。「参加できてうれしいのと、自分でいいのかというプレッシャーも感じてきました」と、七人に選ばれた葛藤もあるなか、木曽の森をつないでいこうと夢中で斧を振った。

御神木は山から上松のまちなかに運ばれると、六・六メートルに長さを整え、両端を十六面に削る「化粧がけ」が施された。これも全て斧を使って行われ、作業は夜中まで続いた。

「無事に寝かすことができて、ほっとしています。お伊勢さんの木ですから何かあってはいけません。怪我のないように、それも大事なこと。御神木を伐採できるっていうのは、すごくありがたい。杣の誇りじゃないですかね」と橋本さん。御神木への思いを込めて実直に斧を振る姿と技法が、次の世代に引き継がれたにちがいない。

取材・文　中村元美／撮影　鈴木和宏、本紙

①技師と小工が御料木を伐る儀を行う。祭場には五色の幣が立つ／②木に感謝し、再生を願う鳥総立て神事／③倒れたときのたすき掛けが2本の条件。内宮木、外宮木共に高さ26m、直径60cm余り／④使われる斧は、元伐斧、節打斧、目戸穴斧の3種類

⑤化粧がけの会場となった上松の「よろまいか」には夜通し地元の人が入れ替わり立ち替わり訪れ、杣人たちを労った／⑥⑦「三ツ紐伐り保存会」最年少の今井竜太さんと杣頭の橋本光男さん

伊勢名物 赤福

本店　〒516-0025 伊勢市宇治中之切町26番地
電話 0596-22-2154(代)　ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ 0120-081-381
https://www.akafuku.co.jp

木曽郡上松町で

御神木祭

六月四～六日

晴れやかな空の下、木曽上松で行われた「御神木祭」。緑豊かな山里に祝い唄やお囃子が響き、たくさんの笑顔が御樋代木を祝い、伊勢路へと送り出した。

「木曽の深山で育てたる日の本一のこの桧　伊勢の社に納めます」。六月四日の朝、上松の真っ青な空に木遣りの声が響き渡った。前日、赤沢自然休養林から麓にある物産館「よろまいか」前へと下ろされた御樋代木を、この日は皆でJR上松駅前の奉安所まで奉曳する。白い法被姿で集まった大勢の人々の背中には、「御神木」の文字が踊っている。

①山麓から奉安所のある駅前に向かって、御神木を奉曳する／②地元の若連中が神楽傘を担いで先導

若連中のいなせな浴衣姿

お木曳の中心となるのは、上松の地域ごとにある五つの若連中。それぞれ揃いの藍染浴衣の着流しに白足袋、草履といういなせな姿だ。日ごろは地元の神社の祭礼を中心に活動する若連中が、五つすべて顔を合わせるのはこの「御神木祭」の二十年に一度だけとのこと。色とりどりの丁子袋や和紙で飾った神楽傘を担ぎ、笛や太鼓のお囃子で、地元の祝い唄「高い山」を歌いながらにぎやかに奉曳を先導する。

緑滴る山々を背景に、木曽川に架かる赤い鉄橋を渡り、木遣り子の振る采に合わせて、「よいしょ、よいしょ」の掛け声で進んで行く。白い法被で綱を曳く大人たちと一緒に、小学生も全校で参加。夕刻、奉曳車は駅前に到着し、御神木を奉安し、神宮で祈祷された「奉安所奉斎大麻」の前で祭典が行われた。

〝誉の木〟に名残を惜しむ

翌日は、終日にわたって御神木の前で様々な郷土芸能が繰り広げられた。

「今回から、上松だけでなく木曽郡全体にエリアを広げました。オール木曽でお祝いしたいと思います」と、伊勢神宮御神木祭木曽奉賛会の山田弘会長。集まった人々は、「この山で何百年も育った木だもの。お名残惜しいね」「ご神体の一番近くに行く〝誉の木〟。娘を嫁に出すようです」と喜びつつも名残を惜しむ。

六日は、八時より奉送行事が行われ、大勢が御神木のお見送りに集まった。

取材・文　堀口裕世

橋を渡って駅前の街並みへ、老いも若きも楽しく奉曳。奉安所では巫女舞などが奉納された

斧の技術と森の歴史を伝える

裏木曽御用材伐採式

中津川市

六月五日

加子母裏木曽国有林にて

御杣始祭から二日後、岐阜県中津川市でも御樋代木を伐採。「裏木曽古事の森」に造られた祭場は急斜面で、山の険しさを物語っていた。

六月五日、御樋代木を伐り出す「裏木曽御用材伐採式」が、中津川市加子母の国有林にて行われた。この辺りは古くから尾張藩が管理した「神宮備林」で、御神木が育つ「裏木曽古事の森」。最近では名古屋城の本丸御殿復元にも使われている。

護山神社での化粧がけ。一晩安置された翌日は、市内各所で御神木祭

杣夫のチームワーク

木漏れ日が揺れる祭場に来賓百四十人が参列し、午前十時から神事、続いて伐採が始まった。内宮木を担当した「裏木曽三ツ伐り保存会」は平均年齢三十七歳の若い杣夫たち。声を掛け合い、チームワークのよさで伝統の「三ツ緒伐り」を披露した。「弦の部分をあまり攻めすぎないよう、斧を入れました」と杣頭の鈴木卓也さん（42）。材が裂けてしまわないよう、神経を集中させた。これまで合同練習を行ってきた神宮式年造営庁造営部（外宮木を担当）と息を合わせ、二本の木は山の斜面に交差して寝かされた。

伐り出された御神木は、中津川市付知町の護山神社へと運ばれ、地元民が見守る中で化粧がけが施された。六日には中津川市内を巡り、御木曳行事が盛大に行われ、伊勢の神宮へと旅立った。

取材・文　中村元美

御樋代木奉迎送

御神木の旅

各地で歓迎される御神木 伊勢で迎える喜びを知る

御杣山で伐採した御神木を神宮へと運ぶ、御樋代木奉迎送。上松町と中津川市からそれぞれ長野県、岐阜県、愛知県を経由し、三重県に入った。かつては木曽川の流れを利用して水運で運ばれていた。第五十九回遷宮から陸路となるが、水運の頃のルートをなぞるように、お伊勢さんをめざす。

二十年に一度の光景を記憶に残そうと、どの場所も群衆であふれ、御神木が一泊する奉安所には手を合わせて静かに祈る姿があった。「名残惜しい気持ちもありますが、無事の到着を祈っています」と沿道での見送りに詰めかけた人は、トラックが見えなくなるまで、その場を離れなかった。

出発

中津川市役所提供

上松町役場提供

御神木を運ぶトラックのナンバーは、上松運送が「63-07」、中津貨物自動車は「20-25」

愛知・一宮

アーケードいっぱいに御神木の歓迎ムード

六月七日朝、犬山市の針綱（はりつな）神社を出発した御神木のトラックは、川沿いの神社に立ち寄り、十六時半、一宮市に到着。お木曳が行われる本町商店街では、地元一宮太鼓の力強い演奏で歓迎し、多くの見物客が盛大に迎えた。氏子など神社関係者ら千二百人が綱を手に練り歩き、御神木はアーケードを抜けて真清田（ますみだ）神社へと運ばれた。

アーケードの中をゆっくりと進む

真清田神社での御神木奉迎祭

三重・桑名

桑名で二台が合流 石取祭でお出迎え

六月八日夕刻、揖斐川沿いにある「桑名七里の渡し公園」駐車場で、木曽、裏木曽それぞれの御神木を載せたトラックが合流。古い町並みの残る道を奉曳し、桑名宗社で二台並んで奉安された。周囲の町々では「日本一やかましい」といわれる石取（いしどり）祭の祭車や山鉾三十八台がお出迎え。深夜まで鉦（かね）や太鼓の音を響かせて、にぎやかに祝った。

桑名で２台のトラックが合流／石取祭でにぎやかにお出迎え

三重・津

雨の中も「エンヤー」と元気よく 県内各地から約千人が奉曳

六月九日十四時、御神木を載せたトラックが津市に到着。国道二十三号の上浜町二丁目から栄町二丁目交差点までの約九百（メートル）を県内各地の神社の氏子ら約千人が一時間かけて、トラックに取り付けた綱を曳いた。その後、御樋代木は三重縣護國（ごこく）神社に奉安され、夕刻からは太鼓や津音頭、唐人踊りなどの地元郷土芸能が奉納された。

先導大幣は和田神社（亀山市）宮司

伊勢市の宮後（みやじり）奉曳団の木遣りで出発

伊勢へ…

度会橋のたもとに到着（６月10日）／おはらい町を抜けて内宮宇治橋へ（６月９日）

取材・文　中村元美、堀口裕世、中川絵美子／撮影　本紙

伊勢鳥羽 みちくさきっぷ
伊勢鳥羽方面へお出かけの際は、観光施設割引がついた乗り降り自由なバスフリーきっぷで！
1DAY 2DAYS ワイド
フリー乗降区間や発売場所はHPをご覧ください！
三重交通 〒514-8635 津市中央１番１号 TEL.059-229-5533
URL. https://www.sanco.co.jp/

第六十三回 神宮式年遷宮「御樋代木奉迎送行事」実行委員会
三重県神社庁
〒514-0005 三重県津市鳥居町 210-2 ☎059・226・8042

木遣り唄と〝エンヤ〟の掛け声

御樋代木奉曳式

川曳　陸曳

六月九日・十日

伊勢の地に辿り着いた六本の御神木は、御神体を納める器に使われる御樋代木。五十鈴川を、外宮界隈を、大勢の人に見守られ、内宮・外宮、それぞれの神域に納められた。

六月九日　五十鈴川を内宮へ

桑名市を出発した御樋代木のトラックが、昼過ぎに内宮前のおはらい町へと到着。居合わせた観光客も興奮気味に出迎える。宇治橋前では伊勢音頭の踊りが花を添え、歓迎式典のあと、トラックは五十鈴川下流の河川敷へ。御樋代木は三台の御木曳ゾリに移し替えられ、川曳で内宮をめざす。

3台のソリに御樋代木を載せ、五十鈴川を遡る川曳。浦田橋、新橋を越え、宇治橋手前を曳く一番ソリ

安全第一で三時間の奉曳

降りしきる雨の中、ソリを曳くのは、神宮式年造営庁の職員と地元の奉曳団員の二百人余り。檜笠に黒い法被の凛々しいで立ちで、背中には白く染め抜かれた「太一」の文字。「官曳」とも呼ばれる川での奉仕は、神さびての雰囲気だ。木遣り衆が振り上げる采に合わせて、「エンヤ」の掛け声で清流を遡る。後方の梃子方は大切な木のそばで気は抜けない。「水量の少ない場所ではソリの動きに注意しました」。力を振り絞って梃子棒で舵を取る。

御神木の重さは約一・五～二トン。降りしきる雨の中、曳き手は声を絶やさず、一歩一歩水を掻き分けて進んでいく。見る者にもヒノキの重みが十分に伝わってくる。

この奉曳には、御神木に供奉する職員たちの列がある。御紋や「太一」の高張提灯の一行が、見守るように同行する。

宇治橋を越えるころには雨脚が強まり、水量も心配されたが、無事三本とも風日祈宮橋まで奉曳。橋の袂から曳き上げると、待ち構えた白張姿の神宮職員や奉仕員によって梃子で運ばれ、お祓いされたのち、五丈殿に安置された。

風日祈宮橋のたもとから神域へと曳き上げる。方向転換でソリを操る梃子方は、浅瀬の砂利をうまく掻き出して、御樋代木に注意を払う

御樋代木に供奉する一行

六月十日　陸曳で外宮へ

折からの雨天にもかかわらず、この日、度会橋東詰で御樋代木を待つ人々の心は晴れやかに熱かった。真っ白な法被姿で「わくわくするな」と明るい笑顔で到着を待つ。津市を出たトラックが度会橋に着いたのは十時四十分。万歳三唱で出迎えた。奉迎式典の後、一本が奉曳車に積み替えられ、他の二本は一足先に外宮に向かう。

「太一」の絵符誇らしく

奉曳車の上では、真っ白な綱で荷締めが行われ、注連縄や鳥居が飾られる。久邇朝尊大宮司の揮毫による真新しい「太一」の絵符が誇らしげだ。

支度が整った奉曳車の前で木遣り子たちが木遣り唄を歌い、「エンヤ」の声をきっかけに伊勢の町衆らが力を込めて綱を曳く。「エンヤ！エンヤ！」の声も勇壮に、伊勢の大路を外宮めざして進んで行く。車軸が摩擦で鳴る「ワン鳴り」もよく響く。「よーいとこせ」と木遣りの〝受け〟の声も楽し気だ。ただ、普通のお木曳とは違い、綱を揺らして遊ぶ〝練り〟や、走って曳く〝エンヤ曳〟は控え、謹んで奉曳する。

五丈殿に安置

夕刻、外宮北御門に着。先行した二本の御樋代木は白張姿の神宮職員らが曳き、町衆が曳く奉曳車も飾りを外し静かに曳き込む。修祓を受ける鳥居のそばには、大宮司をはじめ神職らがずらりと並んで出迎えている。そのまま大庭前まで曳き込み、綱と大梃子を使って静かに車から降ろし、五丈殿に。

これをもって、山口祭にはじまる一連の祭事が無事に終わった。この後、御用材は御樋代となる日を待ち、人々は次の祭りの御治定を待つことになる。

取材・文　中村元美、堀口裕世／撮影　鈴木和宏、本紙

雨に負けず、伊勢のまちに「ワン鳴り」や「エンヤ」の元気な声が響いた／御樋代木は五丈殿に安置

内宮領川曳

令和７年10月16日（木）
ところ　五十鈴川 浦田橋付近～内宮

外宮領陸曳

第54回
初穂曳

神嘗祭をお祝いし、お初穂を奉曳・奉納

令和７年10月15日（水）
ところ　高柳商店街（今社付近）～外宮

当日は初穂曳周辺道路で交通規制を実施させていただきます。
ご理解・ご協力をお願いいたします。

初穂曳について詳しくはこちら

主催：伊勢神宮奉仕会　☎0596-25-5154

令和八年第一次お木曳行事 入門講座 其の二

御用材はいつ 木曽から伊勢へ

文 村瀬昌之（元神宮司庁営林部技師）

二十年に一度の式年遷宮には、太くて長いヒノキが欠かせない。その御用材の育つ山の変遷をみてみよう。

遷宮用材を求めて 御杣山の遷り変わり

神宮式年遷宮御造営に使用される木材を通称し御用材［①］と言い、御用材を奉採（伐り出し）する山を「御杣山」［②］と言う。時代により遷宮規模が異なるため、御用材数量も異なる。現在の造替・修繕規模では本数約一万から一万三千本、材積（丸太体積）約八千五百から一万㎥必要とされている。

遷宮当初（七世紀末）より神宮宮域が御杣山であったが、適材不足により、宮域外へ拡大・移転が図られた。一四世紀半ば、南北朝動乱により木曽山を含む美濃山（岐阜県、長野県）が御杣山となり、第四十一回（天正一三年・一五八五）は、宮川上流の江馬山・大杉山と共に木曽山田立（長野県南木曽町）が御杣山とされた。現在も田立には伊勢山の名が残る。

江戸時代の第四十七回（宝永六年・一七〇九）から第五十回（明和六年・一七六九）は木曽湯舟沢山（岐阜県中津川市）、第五十二回（文化六年・一八〇九）以後は木曽湯舟沢山・蘭山（長野県南木曽町）が御杣山とされた。明治時代以降、さらに木曽川上流及び付知川（木曽川支流）流域が御杣山となり、第六十三回もこの森林地帯（木曽谷国有林・裏木曽国有林）が天皇陛下の御杣山御治定を賜った。

木曽川桴流送。江戸時代後期頃の木曽地方や飛騨地方で行われていた材木・運材の技術 「木曽式伐木運材図会（林野庁中部森林管理局所蔵）」より

木曽川を経て 伊勢湾から大湊へ

木曽御杣山で奉採された御用材は、陸上輸送される以前は木曽川を流送（川下げ）された。御用材を御杣山から曳き出し、木曽川本流まで谷筋を流下（小谷狩り）、木曽川を一本ずつ流し（大川狩り）、錦織綱場［③］（岐阜県八百津町）で桴組み、犬山を経て桑名・長島で一時貯木、適宜に船積み・曳航し、大湊（伊勢市）の貯木場（阿場池［④］）に保管した。

ここで内宮分と外宮分に仕分け、内宮分は鏡宮神社（内宮末社＝伊勢市朝熊町）に隣接する鹿海貯木場に回送し、「川曳」にて宮中に曳き入れた。外宮分は「宮川渡し」上流右岸の宮川貯木場へ回送し、「陸曳」にて宮中へ曳き入れた。

御杣始祭・裏木曽御用材伐採式にて奉採される御神木（御樋代木）は、かつての木曽川流送の跡を陸路で辿り伊勢まで奉搬される。

（むらせ まさゆき）…愛知県名古屋市生まれ。神宮の森林管理に携わりつつ、気候変動等による宮域ヒノキ林の消長原因、万葉集歌に詠まれる「トブサタテ」・斧（斎斧）に刻まれた「七つ目」の意味などを調べ、現在も継続中。

お木曳事典

①御用材【ごようざい】

昔から、御遷材、御遷木、御造営用材、御料木、御木等と色々呼び表されてきた。御用材のほとんどがヒノキで、日本神話（日本書紀）に素戔嗚尊が「檜は以て瑞宮を為る材にすべし」と宮殿の御用材に定めている。

②御杣山【みそまやま】

神に属する所なので神を表す言葉（接頭辞）「御」を伴う。「杣」の文字は、「木」と「山」を組み合わせた我が国独自の文字「国字」とされている。木材を切り出す場所の意味を持つが、その語源は不明である。

③錦織綱場【にしこおりつなば】（旧跡）

鎌倉時代には機能していたと考えられる。右岸から左岸下流に向け鋭角に綱を張り、この綱で流下する丸太を受け止め桴組みをした。御神木の桴組は、大正十年（一九二一）が最後となった。綱場は網場とも呼ばれる。

④阿場池【あばいけ】（旧跡）

現在は埋め立てられ、「大湊貯木場跡」の記念碑に「阿場池」と記してある。十四世紀半ば過ぎには、美濃山から御用材が大湊に着岸している事が『外宮遷宮記』に記されている。「あば」は木材の集積地を表すと考えられる。

大湊の貯木場跡石碑と大綿津見神社

伊勢のお木曳行事 調査団レポート 3

御樋代木奉曳では、五五〇年以上の伝統を継いできた「お木曳」に欠かせない慣習も行われた。

浜参宮

浜参宮（令和７年５月25日）

遷宮に関連する行事では、奉仕する神領民らが事前に身を清める浜参宮が慣わしになっている。二見興玉神社へ出向いて、海で刈り取った藻草の「無垢塩祓」を受け、穢れを祓った。海辺の地域では地元の浜で行う奉曳団もある。

上せ車

陸曳において奉曳車を各団の在所から出発地点まで準備のために曳いて運ぶ。車には提灯や飾りを施し、暗くなれば明かりを灯し、祭りの山車のように道中を練る。各町ごとに趣向を凝らし、本曳とは違ったにぎやかさである。

御樋代木奉曳陸曳の上せ車（令和７年６月８日）

私の旅行スタイル、ふるさと納税。

鳥羽市ふるさと納税 検索

鳥羽に旅行するなら「宿泊観光周遊券」が絶対お得!
寄附金額の3割分の宿泊観光周遊券をお贈りします。

鳥羽市観光協会

伊勢志摩観光の拠点に
鳥羽湾の絶景を望む
湯めぐりリゾートホテル

湯めぐり海百景 鳥羽シーサイドホテル
〒517-0021
三重県鳥羽市安楽島町 1084
☎予約専用 0599-25-8181

伊勢志摩のまつり暦

8月

1日(金)　外宮さんゆかたで千人お参り
五穀豊穣や無病息災を祈った八朔参宮の風習を伝える行事。ゆかたで外宮を参拝する。
時 17時～21時　所 伊勢神宮外宮およびその周辺　問 外宮にぎわい会議　TEL 090・3257・7674

4日(月)　風日祈祭
風雨の恵みを受けて農作物や五穀が豊かに稔るよう御幣帛を奉って祈る。
時 外宮5時～　内宮9時～　所 伊勢神宮　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

17日(日)～18日(月)　佐瑠女神社例祭
芸能の神である天宇受売命がおまつりされている佐瑠女神社の例大祭。
時 神事17日17時30分～、18日11時～　舞台イベント17日18時30分頃～　所 伊勢市、佐瑠女神社（猿田彦神社境内）　問 猿田彦神社　TEL 0596・22・2554

9月

2日(火)　抜穂祭
神嘗祭や諸祭典で神様に奉る御料米の稲穂を抜きとって収穫する神事。
所 伊勢市楠部町、神宮神田　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

5日(金)　夫婦岩 大注連縄張神事
夫婦岩に大注連縄を新たに張り渡す神事。木遣り唄が流れる中、大注連縄が氏子らによって張り渡される。
時 10時～　所 伊勢市、二見興玉神社　問 二見興玉神社　TEL 0596・43・2020

12日(金)　わらじ祭り（神事）
ダンダラボッチの民話に由来する祭り。豊漁と平穏無事を願い、波切神社で神事のあと須場の浜で2メートルの大きなわらじを海に流す。
時 神事：10時～（予定）　関連イベント13日（土）予定　所 志摩市大王町、波切神社周辺　問 波切神社　TEL 0599・72・0165

13日(土)～29日(月)　第31回来る福招き猫まつり
招き猫たちの祭典。作家による創作招き猫の展示・販売や絵付け体験などの催し物がある。

時 9時29分～17時29分（催しにより異なる）　所 伊勢市、おかげ横丁総合案内　TEL 0596・23・8838

22日(月)～24日(水)内宮・10月4日(土)、5日(日)外宮　秋の神楽祭
神恩感謝を捧げ、国民の平和を祈って、内宮神苑の特設舞台と外宮せんぐう館奉納舞台で神宮舞楽が一般公開される（雨天時は内宮参集殿）。
時 内宮11時～、外宮10時～　所 伊勢市、伊勢神宮内宮・外宮　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

10月

5日(日)　御塩殿祭
年中の諸祭典にお供えする堅塩を焼き固める祭り。全国の塩業の発展を祈願する。
時 10時～　所 伊勢市二見町、御塩殿神社　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

6日(月)　神宮観月会
本年の詠題は「山」とし、全国から献詠された短歌と俳句の秀作を冷泉流の作法で披講し、舞楽が奉納される。
時 17時30分～　所 伊勢市、伊勢神宮外宮　勾玉池舞台　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

11日(土)・12日(日)　伊勢まつり
伊勢の最大級のお祭り。見て、参加して、楽しめるをテーマにパレード、イベント、展示・出店などがあり賑わう。
時 11日：9時40分～21時　12日：9時40分～17時（時間は変更の可能性あり）　所 伊勢市、高柳商店街周辺～県道鳥羽松阪線～伊勢市駅周辺　問 伊勢まつり実行委員会事務局（伊勢市市民交流課内）　TEL 0596・21・5549

14日(火)　神御衣祭
神服織機殿神社・神麻続機殿神社で奉織された和妙（絹）・荒妙（麻）の神御衣を奉る祭り。
時 内宮：12時～、荒祭宮：正宮に引き続き　所 伊勢市、伊勢神宮内宮・荒祭宮　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

15日(水)～25日(土)　神嘗祭
その年の新穀を神様にお供えし、豊穣に感謝する。一年間の祭りの中で最も重要な祭り。
時 外宮奉幣：16日12時～、内宮奉幣：17日12時～　所 伊勢市、伊勢神宮外宮内宮ほか　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

15日(水)　初穂曳（陸曳）
奉曳車にお初穂をのせ市内を奉曳し、外宮に奉納する行事。
所 伊勢市、高柳商店街（今社付近）～県道22号～伊勢神宮外宮　問 伊勢御遷宮委員会事務局　TEL 0596・25・5154

16日(木)　初穂曳（川曳）
初穂船にお初穂をのせ五十鈴川を遡り、内宮に奉納する行事。
所 伊勢市、五十鈴川浦田橋付近～伊勢神宮内宮　問 伊勢御遷宮委員会事務局　TEL 0596・25・5154

11月

4日(火)・5日(水)　猿田彦神社　秋季例祭
みちひらきの神様・猿田彦大神を祀る神社の秋の例祭。
時 4日19時～、5日14時～　所 伊勢市、猿田彦神社　問 猿田彦神社　TEL 0596・22・2554

5日(水)　倭姫宮秋の例大祭
倭姫宮の例祭。祭典のあと神楽が奉納される。
時 10時～　所 伊勢市、倭姫宮　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

23日(日・祝)～29日(土)　新嘗祭
天皇陛下が宮中で新穀を神々に奉られるのに際して行われる祭り。
時 外宮奉幣：23日7時～、内宮奉幣：23日14時～　所 伊勢市、伊勢神宮外宮内宮ほか　問 神宮司庁　TEL 0596・24・1111

23日(日・祝)　猿田彦神社みちひらき大神輿
新嘗祭の日に新穀を感謝し、猿田彦神社のご本殿と同じ「さだひこ造り」の大神輿を担いでおはらい町を練り歩く。
所 伊勢市、猿田彦神社　問 猿田彦神社　TEL 0596・22・2554

※データは6月30日現在。まつりや行事は主催者側の都合により、変更又は中止になる場合がある。

ミュージアム情報

斎宮歴史博物館
10月4日(土)～11月24日(月・振)　特別展「不可思議な者たち ―妖・鬼・もののけ―」
いにしえの時代より不可思議な現象をおこす者たち。人々は闇の中に何を見たのか？　斎宮を取り巻く社会環境や風俗を紹介する。
所 多気郡明和町　時 9時30分～17時（入館は16時30分まで）　休 月曜日（祝日の場合は翌日）　TEL 0596・52・3800

神宮美術館
8月29日(金)～11月26日(水)　特集展示「令和六年度奉納・神宮式年遷宮奉賛美術品展」
令和六年度に当代を代表する芸術家の方々から奉納された美術・工芸品を公開。
所 伊勢市　時 9時～16時30分（入館は16時まで）　休 木曜日（祝日の場合は翌平日）　TEL 0596・22・5533

賓日館
9月1日(月)～29日(月)　「重陽の節句展」
賓日館が所蔵している約40体の市松人形と雛人形の7段飾りを華やかに展示。菊の節句にちなんで菊の模様をあしらった調度品等も公開する。
所 伊勢市二見町　時 9時～16時30分（最終入館）　休 火曜日（祝日の場合は翌日）　TEL 0596・43・2003

鳥羽市立　海の博物館
開催中～9月23日(火・祝)　伊勢と東京を拠点に活動するgento designによる企画展「ムダレシピ～伊勢志摩の廃棄物をデザインで調理する」（ギャラリー）
伊勢志摩の海・まち・山にある「ムダ」と呼ばれるモノを、デザイナー視点で新しく調理（再解釈・再編集）し紹介する。

開催中～10月26日(日)　企画展「魚がへ～んしん、かまぼこ参上！」（特別展示室）
伝統的な魚食としてのかまぼこの歴史、加工方法、伊勢志摩のかまぼこ産業の今昔等を紹介。
所 鳥羽市浦村町　時 9時～17時（3月1日～11月30日・入館は16時30分まで）　休 6月26日～30日、12月26日～30日　TEL 0599・32・6006

入館料等は各施設にお問合せ下さい。

ご案内

令和8年新装版「伊勢の神宮カレンダー」10月1日より販売予定

神宮司庁監修・編集のもと、神宮の美しい風景や祭典の様子など全7枚で綴られたカレンダーです。神宮参拝や日々の暮らしにご利用ください（祭典・諸行事の日程、六曜掲載）。

定価▷880円　発行▷伊勢神宮崇敬会

ご注文・お問合せ▷神宮会館
TEL 0596・22・0001　FAX 0596・22・1517

神宮関連　書籍のご案内

永久保存版の式年遷宮ガイドブック『伊勢神宮　式年遷宮参拝ガイド ～2025―2033 御遷宮への道～』

「通り一遍の知識ではなく、深く神宮を知りたい」という要望に応え、遷宮の内容を詳しく紹介するガイドブックが登場。小紙1・2号の倭姫宮特集を担当した皇學館大学非常勤講師の文筆家・千種清美さんによる遷宮それぞれの祭典と行事の描写は臨場感にあふれ、長年神宮を追い続ける写真家・Kankanさんの美しい写真が、神聖で厳粛な空気感を醸し出している。

仕様：A5判／並製
頁数：152（+見返し8）頁
定価：1760円（税込）
発行：ワニブックス　全国の書店で発売中

遷宮トピックス

御船代祭の御治定
内宮　9月17日
外宮　9月19日

令和7年の遷宮諸祭の締めとなる御船代祭が、9月に行われる。山口祭・木本祭同様、天皇陛下の御治定を仰ぎ、日時が定まる重き祭りで、御船代とは、ご神体を入れる器「御樋代」をさらに納める器のこと。御船代祭では神職や儀式に奉仕する物忌らが、内宮・外宮それぞれの山中に設けられた祭場に集合し、立派な御船代ができるよう祈り、忌斧で木を伐採する儀式を行う。

編集長雑感

清めの雨で始まった第63回ご遷宮。上松も川曳も陸曳も合羽着用で向かった。祭場にはテントが立ち、すべて滞りなきようにと居合わせた皆が祈った。上松には5月の現地説明会の際も訪れたが、テントのない森の会場には、内宮木・外宮木以外に何本かのヒノキが残され、床板を突き抜け枝打ちされて真っ直ぐに育つ。この中に将来の御神木が控えているかもしれない。（元美）

次号は令和7年12月1日発行予定

■スタッフ
発行人　中村賢一
編集長　中村元美
編集長代理　堀口裕世　中川絵美子
編集　出口伊都穂　福所淳子
撮影　鈴木和宏（アンプレ）
制作　髙木恵奈（アイブレーン）
印刷　大享印刷（株）

配布・購読のご案内
本紙の配布先▷【三重県内】神宮（内宮・外宮・別宮）、伊勢志摩エリア各市町の観光協会、観光施設、土産飲食店等、近鉄の主要駅【三重県外】近鉄の主要駅、東京大神宮（飯田橋）、三重テラス（日本橋）、全国の神社庁ほか
購読の場合▶5部まで300円（送料込）住所、名前、電話番号、メールアドレス、部数を記入し、伊勢文化舎までお送りください（切手可）。
〒516-0008 伊勢市船江2-22-25
伊勢文化舎内「お伊勢さんニュース」係
TEL 0596・23・5166
ニュース3号・4号がダウンロードできます